

「コンサルさん」と呼ばれて

八千代エンジニアリング株式会社総合事業本部環境計画部（S57）妹尾嘉之

あまり勉強熱心ではなかったので、学部で卒業して 25 年が近づきつつあります。卒業後、建設コンサルタント会社に就職して河川と環境を軸に従事してきました。当初は発注者さんから良く「コンサルさん」と呼ばれ、響きが軽いなあ、なんて感じていましたが今はすっかり慣れました。コンサルタントに従事して、「豊かな生活はできたか?」、「仕事は楽になったか?」、「地位や名誉は得られたか?」と問われたら、即座に「NO!」と答えるでしょう。しかし、私はこの仕事から離れるつもりはまったくありません。（少なくとも現時点では）

というのも、最近はやや言葉として人気のない「土木」の世界は実はとても奥深いものだとわかってきたからです。この年齢になっても、新たな業務と出会うたびに、自分の知識不足を確認し、そして新たな発見と出会えるからなのです。

入社した頃は、発注者さんの要望にあわせて、調査、計画、設計などをこなす日々が続きましたが、途中から情勢に大きな変化がありました。今ではごく普通に使われる「環境」、「合意形成」、「住民参加」などが、変化をあらわすキーワードの一部に該当します。

最近では、小学校の環境学習と組み合わせたりして、河川の調査、計画、設計にいたるまで住民の方々と一緒に作業していくことも増えつつあります。

このような情勢下では「土木」に携わる技術者も従来の土木工学のみならず多様な分野と接していくことが要求されています。

結構大変な要求なのですが、新たな接点が新鮮さをもたらしてくれます。

先日、同期会の 25 年回がありました。それぞれが様々な立場にいるものの、どこかしこからも未来に向けた元気な会話が聞こえてきます。こんな時、京土会の一員に加えてもらっていることに安心と期待を感じます。

未来に向けて、これからも完成することのない道を歩むと思います。新鮮さの無い事例で恐縮ですが、南禅寺にある琵琶湖疏水の「水路閣」は私の原風景です。絵画のような技術の奥深さと、その名称の重い響きに、技術者としての憧れを感じます。土木技術がまさしく土木芸術に昇華した証に感じられるのです。



図1 地元小学生による川の調査
（川の特徴を記録している様子）